

公表

事業所における自己評価総括表【保育所等訪問支援】

○事業所名	聖隷こども発達支援センターかるみあ			
○保護者評価実施期間	2025年9月1日		～ 2025年9月30日	
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	31名	(回答者数)	26名
○従業者評価実施期間	2025年9月1日		～ 2025年9月30日	
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	3名	(回答者数)	3名
○訪問先施設評価実施期間	2025年8月1日		～ 2025年10月31日	
○訪問先施設評価有効回答数	(対象数)	22施設	(回答数)	20施設
○事業者向け自己評価表作成日	2026年2月12日			

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	保育士・作業療法士・言語聴覚士等様々な職種での体制を築いており、カンファレンスではそれぞれの専門性から意見交換を行い、必要に応じて多職種訪問を実施する等、多角的視点で訪問支援を実施することが可能となっている。	担当者一人の視点にとどまらないよう、定期的に多職種による同行訪問を行い、お子様の状況を把握している。また訪問支援計画作成にあたり、お子様にあった最善の支援方法を多職種で検討している。	訪問先での「困り感」やカンファレンス対象児の「支援目標」については、会議等の場で共有する機会を設けているが、個々のケースの具体的な支援内容の検討に至るまでは不十分である。今後は、多職種それぞれの視点を活かし、課題解決に向けた具体的な支援策を検討する時間を会議の中で確保する。
2	法人内の各施設と連携した研修体系を構築しており、保育所等訪問支援に特化した合同勉強会の実施は、訪問支援員のスキル向上と支援の質の均一化を図る貴重な機会となっている。	研修は単発の実施に留まらず、年間を通じて継続的に実施している。日々の訪問現場での課題や具体的な対応策を職員間で共有することで、個々の支援スキルの向上へと繋げている。また、法人内のこども園を実習の場として活用し、実際の保育現場での経験を積むことで、訪問支援員に求められる高度な適応力と実践力を培っている。	各々の専門職としてのスキルだけではなく、『訪問支援員』として求められる役割を明確化し、継続的な研修を通して多角的な視点からのアプローチを習得する。
3	保護者の心配事や訪問先の困りごとに対して、状況に応じた柔軟な対応を行っている。必要に応じて訪問日以外も電話連絡等の手段を用いて連携を図り、保護者や訪問先の不安や悩みに対して状況を把握・共有することで、信頼関係の構築と心理的負担の軽減に努めている。	保護者や訪問先の心配な点や悩んでいる点について、都度確認し、出来る限りタイムリーに返答をすることを意識している。必要に応じて訪問スケジュールを柔軟に調整し、課題となる場面を直接観察することで、的確な状況判断に努めている。また、保護者と訪問先の直接的な連携を促す「架け橋」として、円滑な協力体制の構築を支援している。	保護者や訪問先の心配や悩みに対するかるみあ内での有効な支援手法を、家庭や訪問先等の異なる環境でも応用できるような、療育場面での子どもの姿を深く掘り下げ、支援方法を検討する。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	訪問支援員には高度な専門スキルが求められ、職員が単独訪問が可能になるまでに相応の期間を要する。そのため、新規の訪問支援開始までに長期間の待機が生じている。	チームで運営する児童発達支援と異なり、訪問支援は個々の専門性に頼る面が強く、訪問するためのスキルが必要である。そのため単独訪問が可能となるまでに一定期間を要する。今年度は担当職員の産休・育休取得等があったため、待機児童の解消に至らなかった。	昨今の欠員状況を受け、今年度は研修体制を強化して訪問支援員の早期育成に注力した。今後も経験豊富な職員と初任者を組み合わせた「ペア訪問」によるOJTを継続し、支援の質を担保しながら、単独訪問が可能な職員数を計画的に拡充していく。
2	定期的に通信等を発行することや、HPやSNS等を活用した活動概要や連絡体制等の情報をこどもや保護者に対して発信が出来ていない。	児童発達支援等の内容に関しては、定期的にHP等で活動内容の発信等を行っているが、保育所等訪問支援は個性が高く、また外部での支援がメインになるため、取り組み内容についてどのように発信が必要なのか分かりにくい。また個人情報の観点より、訪問先での写真撮影等が難しい。	必要な時にいつでも訪問支援の情報を参照できるよう、コドモン等の保護者連絡アプリや、法人・施設のホームページといった既存の媒体を活用し、訪問支援に関する情報をいつでもご確認くださいような体制を整えていく。
3	訪問先や保護者の意向を汲み取り、相手にとって『分かりやすい』『実践しやすい』助言や説明をする。	訪問先とかるみあの療育での様子を照らし合わせ、本人に合わせた支援方法や環境調整の提案については共有を行っている。しかしその一方で、アンケート結果より先生や保護者の想う「ありがたい姿」や切実な困り感の把握、役割分担の整理、現場の状況に応じた現実的な提案が不十分であった。	先生や保護者が訪問支援に寄せる想いを受け止め、まずは日々の困りごとや悩みを傾聴し、何でも気軽に相談し合える信頼関係を築く。その上で、現場の状況に合わせた具体的な工夫を一緒に考え、提案して終わりにせず、「実際にやってみてどうだったか」「どんな変化があったか」を共に振り返り、効果的な支援を検討する。